

翻訳による伝道の意義

—浄土の荘嚴と念仏の利益—

大田 祐慈

(和文要旨)

鈴木大拙氏による「本願」(Original Prayer)の翻訳はよく知られているが、2007年に本学会では「祈りとモダニティ」というテーマのもと、哲学者と教学者が「祈り」の現代的意義について議論した。そこで、棚次正和氏が「祈り」を「い」(息)＋「のり」(宣)として「生命力溢れる言葉の宣言」と定義したように、浄土教の教理的な根拠とされる『往生論註』(曇鸞、476-542の著述)は、浄土の荘嚴世界を体系的に詳述するなかで、華の「い」(息)の「ち」(靈)に言及している。そこで、「如来浄華衆 正覚華化生」という『浄土論』(世親に帰される)の偈について、念仏により忽然と浄土に往生する輩は皆兄弟であるという注釈は『歎異抄』と『無量寿経』の平等思想に通底するものである。これをもとにした和讃(如来浄華ノ聖衆ハ 正覚ノハナヨリ化生シテ 衆生ノ願樂コトゴトク スミヤカニトク満足ス)は葬儀において読誦され参列者に浄土の風光を現前する。しかも、下の句には衆生と聖なるものとの交流が描かれており、このような呼応の関係は二河白道の喩えにもみられる。伝道の場において抽象的な教理よりも文学的表現の方が人を感化することがあるが、ときに卑近な表現はかえって宗教的な含意を害い、仏教を道徳的教諭へと変質させる恐れがある。したがって、引用の意図を見失うことなく和語と漢語および英語とのバランスを保つことが肝要となるだろう。

キーワード

浄土の荘嚴、念仏往生、文学的表現

(Summary)

It is well known that DT Suzuki (1870-1966) translates “Hongwan” (Amida’s wish to save the sentient beings) as “Original Prayer”. The philosophers and Pure Land Buddhists of JARE discussed the

significance of prayer in a modern context in 2007. Tanatsugu Masakazu, a religious scholar, defined it as “a declaration of speech full of energy”, dividing the word into two, “breath” (い) and “proclamation” (のり). *Ojyoronchu* or *Tan-luan’s Commentary on Vasubandhu’s Discourse on the Pure Land* is regarded as the foundation of the Pure Land doctrine, because it describes systematically the arrangement of the Pure Land, referring to the significance of life or “breath” (い) and (の) “something spiritual” (ち) of the flowers in the Pure Land. Here, I would like to focus on their brilliance. The text gives his interpretation in an original verse: “The sages of Tathagata’s pure lotus / Are born transformed from the flower of perfect enlightenment”. His annotation suggests that those who are to be born instantly in the Pure Land by means of Amida’s Name should be joined in brotherhood. This sense of equality is shared in other texts such as *The Larger Sutra* and *The Lamentations of Divergence*. Shinran makes the verse into a poem, adding the last part as, “Thus, the aspirations of sentient beings / Are swiftly and completely fulfilled there”. As a matter of fact, this is recited at the funeral, and the attendees are able to imagine not just the representation of the Pure Land but the interaction of the aspirants and the sacred one. Such concordance of the human and transcendent can be also found in the parable of the white path and the fire and water rivers in the *Commentary of the Sutra on Contemplation of Amitāyus*. When teaching Buddhism, literary expression is often more effective than abstract doctrine. However, translators should be aware that there are some loanwords from other teachings, such as Confucianism and Daoism. We should also bear in mind that too much vulgarization of metaphorical expressions may spoil religious connotation. To avoid making the Buddhist teaching into a mere moralistic admonition, it is important to keep the balance between Japanese and foreign languages and not to forget his intension of quoting the other classical materials when preaching.

Key words:

The arrangement of the Pure Land, to be born in the Pure Land by reciting the Name,
literary expression.

はじめに

芦名定道氏は、翻訳に関してシュライアマハー (Friedrich Schleiermacher, 1768-1834) の所説に沿って、翻訳には外国語のもつ異質性をとどめて読者に接近の努力を強いるものと、読者の母国語の言語表現に合わせた自由な意識との二つを挙げている。そして、ドイツは前者の立場によって近代化を達成したという翻訳理論家のベルマン (Antoine Berman, 1942-1991)

の所説を受けて、明治期の日本にとって近代化と精神の拡張をさせるには外国作品を理解しようとする気運と母国語を修正することを厭わない精神の柔軟さを要したと分析する。

この傾向は浄土教の用語が翻訳されるときにも見られるもので、例えば「他力」(“Other-Power”)の原語を唯識で説かれる三性説のなかの「依他起性」(“paratantra-svabhāva”)に遡ろうとする試みがあったが、結局、思想上の制約を受けない“para-bala”が採用された。近著の仏訳『往生論註』(*Tanluan, Commentaire au Traité de la Naissance Dans la Terre Pure de Vasubandhu*)においても「他力」(“Pouvoir autre”)¹と直訳されており、教学の一貫性を保とうとする限り当然のことである。²思想について、『無量寿経』が空の三三昧と滅尽定を説き、『往生論註』には蓮華蔵世界と因が浄であるから果も浄であるという仏性論を展開するように他教の思想を種々取り入れる反面、密教の呪術的な文言を忌避し、また、神々の加護と吉方には無関心な態度をとる。

「浄土」の概念は、「極楽無為涅槃界」という教理的術語から「本願海」「法性のみやこ」という比喩表現まで幅広いだけでなく、建造物として平等院の威容と工芸あるいは絵画として「天寿国繡帳」「二河白道図」の意匠によっても伝えられている。今日、人が浄土の荘嚴世界をもっとも痛切に感じるのは葬送の場であろう。浄土真宗の儀礼は天台声明の流れを汲むもので、道俗(祭式執行者と参列者³)はともに、故人の追善供養のためではなく先人の往生浄土を見送りに集う。

念仏は摂取不捨をはじめとする利益だけでなく、濁世において凡夫の修することのできる唯一の行である。仮に仏道修行について滝行のような荒行のみを連想するとしたら、それは仏教と修験道との混同にすぎないだろう。念仏者は仏の力によって我が身が照らされてはじめて、自分とは異なる大きなものの存在のなかで生かされていることに気が付くのである。これらは、原始仏教の箴言、生活の心がけ、罰則規定ほど明快なものではなく、むしろ大乘仏教の複雑な思想体系による語の両義性(「火」が煩惱／智慧)と文学的表現を伴う価値の転換(「煩惱即菩提」、「常楽我浄」)のために難解なものとなっている。

本稿は浄土の荘嚴世界と念仏往生の利益を範囲として、翻訳による文学的表現(比喩、劇

¹ Ducor, (25), Eracle, (85)にも“le pouvoir autre”とある。

² 信楽峻磨氏(1926-2014)は「他力」を「縁起」(“interdependence”)と伝統教学とは異なる解釈をする。確かに、『往生論註』そのものにおいても、四縁の一つである「増上縁」を「他力」と見なす独自の解釈を加えて従来の意味を転換させているが、「此縁性」と「相依性」を内実とする「縁起」が衆生と阿弥陀との関係にそのまま適用されるかについては疑問がなお残る。信楽氏は、往生の問題に関して「即」を「つく」とする伝統教学の訓読を批判して、往生を現世に引き寄せた解釈を披露する。

³ 岡崎秀磨氏は「受け念仏」が実現するような「み教え」の顕現する「念仏共同体」においては、自己中心の世界観が転換されるという宗学者の見解を踏まえて、物(阿弥陀)を見る主体が存在しながら同時にその消失した状態すなわち信心について考察し、そして、倫理学の知見から宗教儀礼における僧侶の役割は非宗教者に対して「責任」(responsibility)をもち「応答」(response)することであると指摘する。

的な科白) が伝道活動をはじめ、文化の創造と維持に寄与することを明らかにする。

荘嚴世界

『無量寿経』の「去来現佛 仏仏相念」(“The Buddhas of the past, present and future contemplate each other.”)⁴は本来、並立することのない圏外にあるもの同士の共鳴であり、この不思議は他方仏国土をみとめる大乘仏教の世界観の特徴の一つである。同経の第一七願「設我得佛 十方世界 無量諸仏 不悉咨嗟 称我名者 不取正覚」には、諸仏が阿弥陀仏の徳を「咨嗟する」(“praise and glorify my Name”⁵)とあり、「コーラス」にも准えられるような音声に満ちた世界である。

浄土の花の輝きについて、『阿弥陀経』の「青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光 微妙香潔」⁶(“Les bleues ont une lumière bleues, les jaunes une lumière jaune, les rouges une lumière rouge, les blanches une lumière blanche. Merveilleuse est la pureté de leur parfum.” 下線部は筆者による。)と多様な色彩のままで個性が尊重される世界であり、そのかおりは「微妙」(merveilleuse)なものである。

光明の超越性について、『無量寿経』には「青色青光 白色白光 玄黄朱紫 光色亦然 曄曄燦爛 明曜日月」と「日月よりも明曜なり」(La splendeur de ce miroitement dépasse en éclat le soleil et la lune.)⁸とあるが、親鸞は、「南無」が「帰命」であり、「帰説 (悦/税)」であることを躍動する語感をとおして行者に念仏を身体化させることに成功している。この手法を「曄曄燦爛」の「燦」の字に適応できるならば、「喚/歎」に通じることから声なき草木であっても浄土の宝樹はさけび(召喚)と喜びの声(欠)を発していると言えるだろう。⁹また、隣接する音階であっても妨げ合わないことが「清風時発 出五音聲 微妙宮商 自然相和」と述べられている。

和讃には「一々の／はなのなかよりは／三十六／百千億の／光明てらして／ほがらかに／

⁴ Inagaki, <https://web.mit.edu/stclair/www/horai/dharma-treasury-index.htm>

⁵ Inagaki, *ibid.*

⁶ “The blue flowers emit a blue light; the yellow flowers emit a yellow light; the red flowers emit a red light; and the white flowers emit a white light. Each of the lotus flowers glows, weaving an harmonic scene while emitting a subtle fragrance.” (Karen)

“[T]he blue ones radiating a blue light, the yellow a yellow light, the red a red light and the white ones a white light. They are marvelous and beautiful, fragrant and pure.” (Inagaki) と比較して、Karen の文体が叙述的であることがわかるだろう。

⁷ Eracle, (182) “They are marvelous and beautiful, fragrant and pure.”⁷

⁸ Eracle, (91) 光明の威力について、『無量寿経』「讃仏偈」「日月摩尼 珠光焰耀 皆悉隱蔽 猶若聚墨」、『讃阿弥陀仏偈』には「光明照曜過日月 故仏号超日月光」とある。

⁹ 逆に、家畜に比べ魚類は声を発することができない。しかし、その形相から声をたてて泣いていることが観察されるであろうし、痛覚が劣る単純な生物に対する残忍な振る舞いは倫理上の問題があるだろう。

いたらぬところは／さらになし」¹⁰の下の句に「無辺光」¹¹を加えることによって弥陀の廣大無辺の慈悲の働きを表現している。それは、『浄土文類聚鈔』の冒頭「夫無礙難思光耀滅苦証楽」¹²の「証」にあてられた「(才能を)伸ばす」(“s'épanouir”)という語義は光の植物を生育し花を咲かせるという含意がある。¹³

念仏利益

『往生論註』は、『浄土論』の「如来浄華衆 正覚華化生」という偈頌について、三公と九卿の象徴としてある「槐棘」を出自とする者であっても「猜狂」(“vile and despicable,”¹⁴ “fou de jalousie”¹⁵)の子を生じることがあり、その親は(他者からの)「譏誚」(“revilement,” “railleries”)により火を抱えるような苦しみをうけると解釈している。次に、長行に対する注釈として、念仏で往生する輩は「胎卵湿」の生の形態を取ることなく、皆兄弟であるという見方は『歎異抄』五条¹⁶において祖霊信仰を否定する理由として挙げられる「一切の有情はみなもて世々生々の父母・兄弟なり」という一味平等の世界に通ずるものである。

「如来浄華の聖衆は／正覚のはなより化生して／衆生の願楽ことごとく／すみやかにとく満足す」¹⁷という和讃は葬儀において朗詠されるもので、タイラー (Edward Tylor, 1832–1917) が「祈り」を内的交通としたように、下の句には聖なるものと衆生との交流が描かれている。¹⁸浄土宗は「光明遍照 十方世界／念仏衆生 摂取不捨」に基づき「月かげの いたらぬ さとは なけれども／ながむる人の ころろにぞすむ」という宗歌を真宗で「蓋ある水に影はやどさじ」という本歌取りの意図は余宗の批判よりも、むしろ「縁なき衆生は度しがたし」という自力に対する戒めとして理解できるだろう。

¹⁰ “Beams of light, thirty-six hundred / Thousand billion in number, / Shine brilliantly from within each flower; / There is no place they do not reach.”和讃の英訳は以降、<http://shinranworks.com>による。

¹¹ 藤丸 (1998) は阿弥陀仏の光明と平等との関連を明らかにしている。「超日月光」と「無辺光」は阿弥陀の十二光のうちの一つであり、「光炎王」(“light-lord of all brilliance,” CWS. “la reine des flammes,” Eracle, 93) について仏訳は「女王」とする。

¹² “Oui! la lumière inempêchée et inconcevable d'Amida, c'est elle qui éteint la souffrance et fait s'épanouir le bonheur!” Eracle, (29).

¹³ 「信」について、実在性、力能性、有功德性の三点から分析し、二次的に属性(澄明、堅固)が形容詞によって述べられる。(『真宗教学研究』第33号, 13)「証」についても同じアプローチが可能であるならば、行者が浄土の莊嚴世界に触れて、仏と感応するという出来事を得ることになる。

¹⁴ Tokunaga, (37).

¹⁵ Ducor, (57).

¹⁶ As for me, Shinran, I have never said the nembutsu even once for the repose of my departed father and mother. For all sentient beings, without exception, have been our parents and brothers and sisters in the course of countless lives in the many states of existence. On attaining Buddhahood after this present life, we can save every one of them (CWS) .

¹⁷ The sages of the Tathagata's pure lotus / Are born transformed from the flower of perfect enlightenment; / Thus, the aspirations of sentient beings / Are swiftly and completely fulfilled there.

¹⁸ ただし、澤井氏は「ハイラーは、主体的な祈りというのが宗教の最も中心をなすもので、どちらかというところ、儀礼というのは第二次的なもので、祈りに比べて儀礼の意味をちょっと低く位置づけるというところがあります。」と指摘する。(52)

浄土教において、無明煩惱はたんに智慧の欠如ではなく煩惱具足（熾盛）とあるように生存に根ざした問題として論じられており、『往生論註』の「千歳暗室」（『迦葉品』ではランプが闇を照らす）では十二支縁起の無明と連続する「行」（*samskāra*）として説かれる。また、『教行信証』は「称名能破衆生一切無明 能満衆生一切志願」（“The Name breaks through all the ignorance of sentient beings and fulfills their aspirations.” CWS）とあり、後半の句に対応する仏訳 “[E]lle [La récitation] est en mesure de aussi combler les aspirations de tous les êtres vivants.” (Eracle, 34) は、称名の働きとして無明を破ることよりも、往生の願いを「満たす」（“combler”）ことに力点が置かれた翻訳となっている。

本願のはたらきは譬えた「不朽薬」（『入法界品』では自在薬）は、種子に上塗りされて水や火に投じられても爛れることも、焦げることもないという不可思議な力をもつという。「霊薬」（“elixir”）は神秘から高価な「乳香」（Frankincense）が想起され、「防腐剤」（“antiseptic”）¹⁹は「没薬」（myrrha）にも比せられ、また、科学的な語彙であるが、「軟膏」（“salve”）²⁰は自身の傷に塗布する身近な常備薬として、同じ語源の「醜翻」（“sarpis”）とともに親しみを感じさせる日用品をもちいた翻訳である。

経典の冒頭「如是我聞一時」（“Evaṃ mayā śrūtaṃ ekasmin samaye”）は観衆によびかける「傍白」（“say in aside”）²¹であり、これは、アメリカ文学の傑作『白鯨』（*Moby Dick*, 1851）の冒頭「まかりいでたのはイシュメールと申す風来坊だ。」²²（“Call me Ishmael.”）というエリザベス朝劇の「独白」（soliloquy）²³を反映した劇的な訳出と同様の臨場感がある。

二河白道の譬は、行者が危機的な場面において、目の前の真実の道を歩むように釈迦に励まされ、阿弥陀が彼岸から「汝一心正念直来我能護」（“Toi! Viens directement avec la pensée correcte d’un cœur unique ! Je te protégerai !”²⁴）と呼びかけている。これは、釈迦の発遣に呼応する弥陀の救済意志が単純未来によって表明されている。一方、“Eh toi ! Avec le cœur unique

¹⁹ Inagaki, *ibid.*

²⁰ Tokunaga, (106).

²¹ サンスクリット（語）は「処格」（“locative”）により時の一点を示しているが、パーリ語の対応句（“Evaṃ me sutāṃ ekam samayaṃ”）の「対格」（“accusative”）の用法は時の継続よりもむしろ想起を含意するものである。「聞かれた」（“sutāṃ”）という過去分詞の不定用法は「叙述的」（“narrative”）よりも「意思疎通的」（“communicative”）なものであると文法的に分析される。下田（191-93）。

“I (Ananda) heard the following from the Buddha, Shakyamuni.” (Karen) と “J’ai entendu ceci :” (Eracle, 51) “Le Bouddha dit à Ananda :” (Eracle, 95) はともに「叙述的」（“narrative”）ものである。一方、“Voici ce que j’ai entendu :” (Eracle, 145) と “Voici tel quel ce que j’ai entendu.” (Ducor, 117) は「意思疎通的」（“communicative”）といえよう。

²² 田中西二郎氏（1907-1979）による。

²³ Olson, (62).

²⁴ Ducor, (135).

et la pensée correcte, viens tout droit; je puis te protéger.”²⁵では、我に任せよと施主（阿弥陀）が行者を迎え入れる準備ができていることを直説法現在によって語りかけている。

翻訳と伝道

光明の功德と念仏の利益について、和語と漢語のバランスの保ち方から訳者の翻訳の方針を窺うことができるがわかった。親鸞は、和讃について「やわらぎほめる」という左訓を施しながらも、いくつかは経文の難解な語彙をそのまま引用して作成し、また、阿弥陀に対して敬語を付加しながら主語と目的語の反転をさせるという創意を發揮している。

英語の句動詞は、基本的な語彙を用いて「身体の」(physical) 動作を表現しており、例えば「はなつ」(“give off”) は、ふるさとで花のかおりが醸し出されるような場面を想起させる。日本文学で、和語が漢語とは異なる形で風物との親和性をもつことは貴族が風の声「そよ」²⁶に頷きを見出し、武士は風にふるさとの親に便り²⁷を託したことに見られる。このように祇園精舎の鐘の声に無常を聞くような感性があれば、「いのり(祈り)」を「息宣り」とも、「いのち」を「息の霊」とすることにも違和感がないかもしれない。

しかし、現代人にとってはむしろ外来語(漢語あるいは英語)による「物理的」(physical) な記述のほうが理解しやすいようだ。実際に、華が香気を物質的に「放出し」(“emit,” “émettre”) または「(幾何学的に) 放射する」(“radiate”) という客観的な記述が正確であるように思われる。しかし、前者の「はなつ」(“give off”) が表現しているのは「眼光の鋭さ」というような身体と精神の強さとの連動を言い当てているのに相応しいものである。同様のことは、功德が我々に「回向される」(transmitted) ことを阿弥陀が「てづから届ける」(“turn-over”) という言い回しによって手料理のもつ温かみが運ばれるだろう。

公共圏における儀礼として、毎夏、戦没者追悼の為に平和公園²⁸では鐘が鳴らされ、千鳥ヶ淵²⁹の式典では詩歌がよまれる。また、ライプニッツ (Gottfried Leibniz, 1646-1716) が「教育はすべてを可能にし、熊を踊らせる」(“L'éducation peut tout: elle fait danser les ours.”) というように、「浄土に行く」という少年に「参ると言え」と訂正をせまる老婆と念仏を辛気臭いと言う孫娘に「(お前には) 選択本願の念仏がわからないのか」と応酬する祖母の姿には教義以

²⁵ Eracle, (103-04).

²⁶ 「ありまやま 多なのささはらかぜふけば いでそよひとを わすれやはする」(大式三位)

²⁷ 「薩摩鴻おきのこじまに我ありと おやにはつげよ八重の潮風」(『平家物語』二巻、「卒塔婆」)

²⁸ 田口吉生氏は、広島平和記念資料館の設計した丹下健三氏(1913-2005)の提唱する「平和の軸線」を延長して、広島市環境局中工場のなかに広島湾へと抜けるガラス製の歩道を設けた。辺りの宇品島には原生林が生い茂っており、象徴的に浄土への連絡路とも見立てられる。

²⁹ 「千万のいのちの上に 築かれし たいらけき世を 生くる悲しさ」(大谷嬉子)では「平和」を和語「たひらけし」とする。「光顔巍巍 威神無極 如是焰明 無与等者」について、阪本純子氏は光明が優れた功德を示す定型句が *Mahābhārata* と *Udānavarga* に遡ることを指摘する。

上の迫力があるだろう。また、祖母から傷の手当を受けた者にとって「軟膏」（本願の喩えとしての不朽薬）は懐かしい思い出として蘇るかもしれない。

むすび

「無為自然」「蟋蟀春秋を識らず」などの人口に膾炙した道家の警句あるいは歴史書の教訓を思想と別なところで強調してしまうと経典と論書の引用の意図から離れてしまうことになる。それは「少欲知足」（*appa iccha*）という原始仏教の金言も例外ではない。これは出家者に対する徳目であるという³⁰文献研究の成果を重視すれば、欲望の適切な調節は恣意的な解釈となる恐れがある。しかし、現代においては観光寺院の庭園のつくばいに刻まれた警句のほうがより世に浸透しており、ここに至って教義とは隔たったものとなる。以下に、活動家と教団の宗教的信念が翻訳を通して表明されている例を紹介する。

まず、『歎異抄』一条「（往生をばとぐるなりと信じて念仏申さんとおもひたつところのおこるとき）すなわち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり」([Y]ou are immediately brought to share in the benefit of being grasped by Amida, never to be abandoned. CWS. / [I] nous fait aussitôt prendre part au bienfait de son embrassement indéfectible. Ducor, (27)) について、阿満利磨氏は「あずか（与）る」を「阿弥陀仏の事業に参加する（こと）」と社会実践の根拠として、エコロジカルな視点を持つ思想家 Joanna Macy と連絡しようとする学際的な姿勢をとっているが、英仏訳の限りではわれわれが阿弥陀の恩恵に浴するようにしむけられているというのであるから、これは阿満氏による漢語を用いた主体的な解釈である。

また、天台宗は『山家学生式』の「照千（于）一隅」³¹（“Brighten the World at Your Corner”）を理念として掲げ 1969 年から啓発運動を展開し、みずからの仏性を輝かして世の中を啓発する運動をしている。真宗は弥陀の光明を蒙り念仏をよろこぶ「結ぶ絆から、広がるご縁へ」（“From tying bonds to great encounters”）を標榜している。

そして、「もったいない運動」で知られるマータイ氏（Wangari Maathai, 1940-2011）は 3R（Reduce, Reuse, Recycle）に加えて「うやまい」（*respect*）と「感謝」（*gratitude*）を来日して学んだという。逆説的ではあるが、人は「当たり前なもの」（*something we take for granted*）と享受しているものの有難さに気がつくときに感謝の念が生じるという。³²ここには「無料で」（*gratis*）という語源的に派生する語を平易な言葉で自在に語る軽妙さがある。

³⁰ 矢島(2003)。ただし、李(2019)のコーパス研究は「少」が祈使句として用いられると全否定の用例を挙げている。

³¹ 「径寸十枚 非是国宝 照千（于）一隅 此則国宝」（『山家学生式』）は齊王が魏王の間に、自国には有為の人材による繁栄があるという返答したという故事（『史記』「田敬仲完世家」）による。

³² Wangari Maathai, “Last Interview”, <https://youtu.be/4Ks1YftUE5c>.

今後の課題として、真宗は「涙にぬれるあなたの顔が本願を聞いて笑顔になる」教えであるという説示と文献学が明示する「和顔愛語」との相違を比較する。また、念仏の利益に関して和讃「南無阿弥陀仏をとなうれば／堅牢地祇は尊敬す／かげとかたちのごとくにて／よるひるつねにまもるなり」とあるように浄土教による密教の評価、すなわち神祇観について論じたい。

本稿の作成にあたり本願寺派教学助成財団から令和二年度の慶華奨学生に採用されたことをここに感謝申し上げます。

参考文献

Ducor, Jérôme. *Shinran*, Infolio, 2008.

———. *Le sūtra des contemplations du Buddha Vie-Infinité: Essai d'interprétation textuelle et iconographique*, Brepols, 2011.

———. *Le Tannishō: le bouddhisme de la Terre pure selon Shinran et ses prédécesseurs*, Cerf, 2011.

———. *Tanluan, Commentaire au Traité de la Naissance Dans la Terre Pure de Vasubandhu*, Les Belles Lettres, 2021.

Eracle, Jean. *Sur le Vrai Bouddhisme de la Terre Pure*, Édition Point, 1994.

———. *Trois Soutras et un Traité de la Terre Pure*, Édition Point, 2008.

Inagaki, Hisao. *T'an-Luan's Commentary on Vasubandhu's Discourse on the Pure Land*, Nagata Bunshodo, 1998.

Mack, Karen. "The Amida Sutra", *Kyōka Kenkyū (Journal of Jōdo Shu. Edification Studies)*, vol. 14, 2003.

Nasu Eisho. "Fluidity of Shinjin: Personal Reflections on Ways of Talking about Shinjin in Everyday Buddhist Living", *The Pure Land New Series*, vol.25, 2009, 39–47.

Olson Charles, *Collected Prose*, edited by Donald Allen and Benjamin Friedlander, California UP, 1997.

Tanaka, Kenneth. "The Dimension of Wisdom in Shinran's Shinjin: An Experiential Perspective. within the Context of Shinshu Theology", *Journal of Indian and Buddhist studies*, vol. 63, (3), 2015, 1095-1105.

Tokunaga, Michio. *The Pure Land Writings*, vol. 2, The Shin Buddhism Translation Series, 2018.

芦名 定道 「哲学的思惟と聖書翻訳の問題」 『理想』 (701) 2018, 75-86.

阿満 利麿 『NHK こころの時代 歎異抄にであう 無宗教からの扉』 NHK 出版 2022.

安達 俊英 「浄土三部経」と『往生論』 『佛教大学総合研究所紀要』(別冊) 1999, 81-109.

- 大峯 顕 「祈りとモダニティ —宗教から現代を考える」 『宗教と倫理』（別冊）第8号 2009, 3-15.
- 岡 亮二 「「行巻」六字釈の一考察」 『印度学仏教学研究』 第29巻 2号 1981, 483-490.
- 岡崎 秀磨 「儀礼を執行するということ—中動態に注目して—」 『浄土真宗総合研究』 12号 2019, 83-103.
- 勝木 太一 「Evam me sutam について」 『印度学仏教学研究』 第27巻 1978, 156-157.
- 阪本（後藤） 純子 「Sukhāvativyūha（梵文無量寿経）の韻律と言語：歎仏偈・重誓偈」 『印度学仏教学研究』 42号 1994, 930-935.
- 下田 正弘 『仏教とエクリチュール：大乘経典の起源と形成』 東京大学出版 2020.
『真宗教学研究』 第33号 真宗教学学会 2012, 1-35.
- 武田 龍精 『親鸞浄土教と西田哲学』 永田文昌堂 1991.
- 徳永 一道 「礎としての聖教—聖典英訳から学んだこと—」 『浄土真宗総合研究』 第14号 2021, 9-27.
「宗教とヒューマニズム」 『宗教と倫理』 第1号 2001, 31-35.
- 宮本 要太郎 「日本宗教における「信心」」 『宗教と倫理』 別冊 第9号 2021, 37-59.
- 長谷川 岳史 「隋代仏教における『観無量寿経』理解：慧遠の「五要」を中心として」 『佛教学研究』 64号 2008, 1-16.
- フリードリヒ・ハイラー著 『祈り』 深澤英隆監修 丸山空大 宮嶋俊一訳 国書刊行会 2018.
- 藤丸 智雄 「曇鸞の光明観に関する考察」 『インド仏教学研究』 第5号 1998, 58-70.
- 矢島 道彦 「少欲の「少」(appa-)について仏教の修行法」 『阿部慈園博士追悼論集』 21号 2003, 33-46.
- 李 貞愛 「中国語の副詞“少”の意味・機能再考：「少量肯定」と「全量否定」について」 『慶應義塾外国語教育研究』 16号 2019, 1-21.